DAYA
COLECTIVO TEATRAL

ニュース　DAYAについて　メンバー　公演・団体への想い　公演情報　その他

出展：DAYA https://www.daya.co.jp/

DAYA
COLECTIVO TEATRAL
PAZ HARÉLA
【パサレラ】
小夜鳴き鳥のこえがする

過去と共に歩く。

仲間と共に歩く。

あなたと私の「ランウェイ」

2008 年、コロンビアで開催された国際女性演劇フェスティバルにてパトリシア・アリサによる公演『パサレラ』が上演された。

「いつでも、どこでも、誰もが当事者として語り、ランウェイを歩く」

そんなコンセプトに深く共鳴し、わたしたちのパサレラプロジェクトを開始。

20 代から 70 代まで、幅広い年齢層のプロジェクトメンバーが

性暴力被害の当事者として語る「生」の言葉を、ランウェイウォークとモノローグとともにお届けする。

ランウェイには、「滑走路」という意味もある。

画面越しのあなたへ、明日へと飛び立つ勇気を与えられますように。

パサレラの始まり

2008 年、竹森、花崎、仮屋、橘が『女／鬼～女たちのコラージュ』という作品をつくり、この作品がコロンビアで開催された国際女性演劇祭に招聘作品として上演されたことが『パサレラ』との出会いのきっかけである。

コロンビアの女性演劇祭に参加した竹森と仮屋は、ラテンアメリカの代表的劇団ラ・カンデラリアの創設者の一人で、俳優・演出家であるパトリシア・アリサの『パサレラ』に衝撃を受けた。そして、「演じる女性自身が当事者として、リアルで多様な自分を見せる」というコンセプトのこの作品を、日本でも上演したいと考えた。竹森らは、その場でパトリシアに日本でパサレラを上演する許可を願いでたところ、パトリシアは「どこでも、いつでも、誰でも 当事者が語りランウェイしエンパワーする権利がある」と抱きしめてくれた。

その後、パサレラの上演実現のため、パトリシアとの勉強会やワークショップを始めたが、この時はパサレラを舞台で上演するまでには至らなかった。

それから 10 年の歳月が流れた 2018 年、竹森は Sapling*に参加し、子ども時代のフリーズしていた被害について考え始め、改めて当事者の声を演劇で発信したいと思うようになった。

そして 2019 年冬、
新たなメンバーも加えたパサレラ 2020 プロジェクトをスタート。

はじめは「出演者」の気持ちで集まった新たなメンバーたちも、お互いに話すうちに、それまで無意識であった自分への被害に気付き、自分の問題として語り始めた。

それは、滑走路という意味をもつ『パサレラ』という作品が飛び始める瞬間だった。

（取材：矢嶋直美）

＊一般社団法人 Spring とは
性被害当事者が生きやすい社会の実現を目指す当事者を中心とした団体。性被害の実態に即した刑法性犯罪の改正を目指して、アドボカシー活動をしている。性被害を受けた人がフリーズ（凍りつき）から動き始め、人生の冬を過ごしているすべての人の心に春がくるよう願いを込めて、2017 年 7 月 7 日に設立された。
現在、DAYA のメンバーの竹森なども参加している。

Paz haré la

Una creación coloctiva de
la Escuela de Mujeres en Escena
de la Corporación Colombiana de

Dirección Patricia Ariza

パサレラができるまで

「セルフナラティブからの作品づくりの効果」 橘たか

当事者へのケアのひとつに物語ることから捉えなおすナラティブ・セラピーがある。パサレラの作品づくりでは、「自らの経験を物語ったこと」つまり「セルフナラティブ」をもとにした作品づくりをした。私たちはまず、被害当事者が経験を語った書籍を読み、「自身の経験を物語る」ということがどのようなことなのか、共通するイメージを持つことから始めた。各々が書籍を読んだ感想を伝えあい、「物語ること」を深く考えた。

——自分がどのような経験をし、その時どのような気持ちになったり、何を考えたりしたのか。

つらい経験を物語ること。それは、語る人にも聞く人にも、実はとても危険なこと。語る人は、当時受けた恐怖の感情を追体験してしまうかもしれない。聞く人も、自身の経験と重ね合わせてしまい、恐怖を感じるかもしれない。そして、そういった感情や感覚は、作品づくりの場だけではなく、日常生活にも侵食してしまうこともある。私たちは、そんな危険を回避するために、作品づくりのプログラムをとても慎重に組み立てた。始まりと終わりに、気持ちをリセットするための「儀式」のような瞑想をするのもその一つだった。追体験してしまった感情には、「この感情は今のものではない」と、経過した時間を思い出せるように。重ね合わせてしまった恐怖には、「私のものではない」と、リセットできるように。作品づくりで感じてしまった負の感情をその場に置いていき、家には持ち帰らない。そういったことを徹底しながら、メンバーから物語られた言葉を少しずつ「作品」へとしていった。

つらい経験を物語ることは、危険であるのと同時に良い面もある。物語った言葉で多くの人につらい現実を伝えることができる。また、冒頭で触れたナラティブ・セラピーでは、語りを寄り添って聞くことにより、当事者の気持ちをケアするそうである。物語ることは当事者のエンパワメントにつながるという。

今回の作品づくりでは、当事者でもある参加メンバーの多くは、作品に関わることがエンパワメントの機会になったと感じていたようである。また、パサレラを視聴した方からは、「作品を視聴することだけでも、エンパワメントのきっかけになった」という声が聞こえてきた。

パトリシアの言葉、「どこでも、いつでも、誰でも 当事者が語りランウェイしエンパワーする権利がある」。それは、作品自体だけではなく、作品づくりの過程、そして作品を視聴する方も含めての言葉であったのだと、今まさに感じている。作品づくりにとどまることなく、これからも多くの人と、当事者がエンパワメントする様々な機会を増やしていきたい。

プロフィール
まちづくりコンサルタント／土木技師
メキシコの路上で出会った路上演劇をきっかけに、住民参加のまちづくりにおける演劇の可能性に気づき、住民参加専門のまちづくり会社を設立。現在、演劇的手法を取り入れたまちづくり企画や、道路上や公園などの空間での企画を手掛ける。DAYA 代表。

『パサレラ～小夜鳴き鳥のこえがする～』を鑑賞した方々からの声

2020 年 12 月のオンライン公演は 2 日間で約 120 人が視聴。視聴者からは共感の声が多く寄せられた。また、その後、大学生向けの上映も実施。視聴した大学生からも声が届いている。

― 全体

・ 色とりどりのパッチワークのように、いろんな色の残像が心に残っている。
・ 見ている間はいろんな感情が渦巻いて、最後はすがすがしい気持ち、前を向いていこうという気持ちになれた。
・ 本当に作品を作るまで、作って、発表されて、勇気のいることだったろうと想像しながら、観られたことはとても良かった。
・ どんな形であれ辛いことを公に話すのは勇気とエネルギーが要ることだと思う。

― プロローグ　ランウェイ

・ 中年女性や男性が歩いてきて、また言葉を発したりするなど、最初は何が何だかわからなかった。

― 叫び

・ 魂の叫びとして心が慄いた。

― 女子会

・ 変なアタリマエはあんな風にぐしゃぐしゃにまとめてポイしたい。

― フリーズ

・ 「知らないなんて嫌だ」という静かな強い思いに胸を打たれた。

― カワレル

・ なぜか、３人の漫才が一番記憶に残っている。どうしてだろう、自分でもよくわからない。

― 黒い履歴書

・ 紙を破り捨てるシーンが非常に痛快で好き。

― 鎮魂歌

・ 歌の力強さに引き付けられた。

― 記憶と希望

・ どんな環境にいても、どんな体験をしたとしても、生き延びる力を誰もが持っているというメッセージが伝わった。

― 溶けていく石

・ 男が男を好きになるって異常？そもそも男と女の２つだけ？疑問は尽きない。

― エピローグ　ランウェイ

・ 閉塞感から解放される。

PAZ HARÉ LA～小夜鳴き鳥がみえた @路上演劇祭JAPAN Version
Opening Runway
1:20 / 17:56

性暴力等犯罪被害専用相談電話「アイリスホットライン」